PALIS'S TEXT WORKS

Teacups

～第二話～

© Palismiki

『Teacups』
第二話
「ここに在るもの」

［登場人物］

１：琴乃(18)…主人公『teacups』店員
２：真鈴(18)…『teacups』店員・マスターの姪
３：マスター(41)…『teacups』店長
４：小原奈々(17)…エピソード主人公。女子高生
５：環　凪(17)…奈々の幼馴染。女子高生
６：瀧川慎之介(18)…遊び人の高校生。
７：モモコ(17)…慎之介に片思いのギャル女子高生。
…他

作：茂呂 勝政

1	小原家屋外（朝）

〇小原家外観。奈々の父の怒鳴り声が被さる。

奈々の父「なんだっ！？その態度はっ！！」

〇奈々が家の扉から出てくる。
開いた扉の中で父親が怒鳴っている。

奈　々　「いってきまーす！」

奈々の父「待てっ！！まだ話は終わって無いぞっ！！奈々っ！！」

〇奈々は急ぎ足で家から離れようとしている。

奈　々　「まったく……朝から付き合ってらんないわ」

2	凪との待ち合わせ場所（朝）

〇目印となる場所（電信柱や何かの看板など）の前で凪が
鞄を持ってたたずんでいる。奈々とは制服が違う。
〇奈々が凪に気付くと急いで駆け寄る。

奈　々　「凪～！（手を振ってにこやかに挨拶）」

〇奈々を確認すると、凪は微笑んで静かに手を上げる。

3	バス停までの凪との通学路（朝）

〇奈々と凪が並んで歩いている。

凪　「へぇ…また奈々のお父さん爆発したの？」

奈　々　「ほんと…まったく朝からやんなっちゃう。よくもまあ、
アレだけキレるネタがあるもんだよ」

凪　「とかいって、どうせまた奈々が原因なんでしょ？
今朝はどうしたの？」

〇奈々がくるりと凪の前に向き直って、深々と頭を下げる。

奈　々　「おはようございます……」

奈　々　「……ってちょっとサボっただけ」

凪　「それだけっ！？…相変わらず厳しいなぁ～」

奈　々　「でしょう？ありゃ天然記念物モンの脳みそだよ」

凪　「旧石器時代の？(笑)」

奈　々　「いやいや、あれはホモサピエンス……ううん、エイプスね。サル同然よ」

凪　「ひっど～い(笑)」

〇会話をしながら二人はTeacupsの近くまで差し掛かる。
Teacupsの前では真鈴が掃除をしている。(背景程度)
〇真鈴が二人の会話に気付く。
〇二人はTeacups近くのバス停に並ぶ。
※以上の情景を以下の台詞に被せて描く※

奈　々　「でもさ…ウチの父親見ても解るけど、男ってほんと単純バカでどうしようもない生き物よねぇ～」

凪　「アンタ…自分の父親引き合いに出して、そんな……(苦笑)」

奈　々　「だぁって～！男って乱暴でガサツで臭くて汚いだもんっ！」

凪　「ち、ちょっとあんた、女子校行って変なシュミに感染した？」

奈　々　「やだぁっ！…ただ、あたしも結局は男の下にお嫁に行くんだなぁ～って考えたら気が重くなっただけ」

凪　「お嫁って…そんな先の話を(苦笑)」

奈　々　「現実見てるだけよ。結局王子様みたいな男なんて物語の中だけ…空想の産物なのよ」

〇奈々、凪の手を取って。

奈　々　「凪！あたしらもしお互い結婚しなかったら…ずっと一緒にいようね！」

凪　「……そうね、それもいいかもね(遠い目)」

奈　々　「あ～あ、せめてどっちかが男だったらなぁ～、あたしら結構お似合いのカップルになってると思わない？」

〇奈々から凪の腕を取って、腕を組む形。

凪　「性転換でもする？(笑)」

奈　々　「ぜひっ！(凪を指差す)」

凪　「ずるいっ！奈々が男になればいいじゃないか～！」

奈　々　「何言っちゃってるの！？凪ったら中学時代から女子にモテモテだったじゃん♪男役って言ったら凪だよ！」

	凪　「いやよ～！あたし、病院とか手術とか…そういうのパス！」 奈　々　「あたしだってやだっ！男なんかになるなんて絶対無理！！」 ○その光景を眺めていた真鈴が微笑んでいる。 ○やがてバスがやってくると、奈々だけ乗り込む。 ○奈々がバスの中から窓越しに笑顔で小さく手を振る。 それに対応して凪も微笑みながら小さく手を振る。 ○奈々を乗せたバスが走り去り、バス停には凪だけが残される。 凪　「……ずっと一緒にいよう……か（何か含んだように微笑む）」 ○凪も静かに歩き出す。
4	奈々の女子校（昼間）
	○学校外観。 ○空の絵に被せて、携帯電話の、発信者の耳に響く発信音。 ○相手が出る。 モモコ　「あ、もしもし？慎くん？あたし～♪…（相手に誰だか解っていない対応をされる）……えっ？ちょっ…あたしよ！あたし！モモコ！」 ○モモコが授業をサボって屋上で携帯電話を掛けている。 モモコ　「元気～？…え？ヒマだから電話しちゃった……うん、……ふふふっ、ばぁ～か♪（甘）」 モモコ　「ね、ね、慎くん今日ヒマ？…えっ？ヒマ？……カラオケ行こうよぉ」 モモコ　「え？マジ！？…ＯＫ！？それじゃあ6時に駅前で……え？友達？？……連れて来るの？」 モモコ　「…お前も用意しろって……今からじゃあ……あ、うそうそ大丈夫、大丈夫だからもうナシとかナシ……うん、うん解ったぁ…うん、じゃあとでね～♪」 ○電話を切る。 モモコ　「あ～あ、……せっかく慎くんと二人で遊べると思ったのになぁ……邪魔者が二人も（ため息）」 モモコ　「二人かぁ……使えるヤツいるかな？」

5	凪の共学校～教室（昼休み）

〇凪が学食に向かおうと席を立つ。

凪　「さてと、ご飯♪ご飯♪」

〇近くの席で女子二人が話している。一人が泣いている。
※泣いている女生徒（A）泣いていない女生徒　（B）※
〇凪が気付き話しかける。

凪　「何？どしたの？」

女生徒B「この娘、やっぱり彼氏にフラれちゃったんだって」

凪　「ええっ！？この前付き合い始めたって聞いたばっかだけど！？」

女生徒A「凪～～っ！（泣）」

〇Aが凪に抱きついて泣く。

5	凪の共学校～学食（昼休み）

〇学食で凪・A・B三人がテーブルを挟んで食事をしている。

女生徒A「彼、はじめは優しかったんだよ……紳士で素敵で…
あたし、結局騙されてたのかなぁ……？」

女生徒B「あの瀧川だよ！？…信用するあんたが馬鹿なのよ。
あたしは初めからやめとけって忠告したからね」

凪　「瀧川って……あのC組の？」

女生徒B「そうそう、二度同じ女と歩いている所を見たことが無いという、あの悪名高き男よ……一部では、被害者の会まであるって噂よ」

女生徒A「うわぁ～んっ！！瀧川くぅ～ん！！（泣）」

凪　「……瀧川ねぇ」

〇他人事のように食事を進める凪。

女生徒B「ま、アンタもくれぐれも気を付けなさいよ……って、
アンタは心配無いか」

凪　「どうせ声も掛けられませんよーだ」

女生徒B「っていうか基本的にアンタ、男に興味無いもんね」

〇食事を詰まらせて、むせる凪。

	凪　「げほっ！ごほっ！！……ん、んなこたぁないよっ」 女生徒Ａ「ぐずっ…あ、そういえば凪、小椋に告られたのに断ったんでしょ？小椋、落ち込んでたよ～」 凪　「いーから、あんたは泣いてなさい」 女生徒Ａ「うぇええ～んっ！！瀧川くぅんっ！！（泣）」 凪　「別に……なんとなく波長が合わなかっただけ」 女生徒Ｂ「波長ねぇ……」
6	奈々の女子校～校舎裏（午後…清掃時間）
	○校舎裏でモモコが携帯電話を掛けている。 モモコ　「ミコ！ダメッ！？ねぇ～！！頼む～！！」 ミコ（電話）『ダメダメ～、今晩彼氏とデートだもん…』 モモコ　「このぉ！薄情者！！」 ○モモコ電話を切る。 モモコ　「全滅かぁ……まったくどいつもこいつも低レベルな男相手に発情しくさって～！」 ○モモコ、校舎の壁にもたれ掛かって腰を下ろす。 モモコ　「マジどうしよう……ていうか、もう一人で行くか～？」 ○モモコの座っている校舎の上の階（2階か3階）で窓が開き奈々が顔を出す。 ○奈々はそのまま黒板消しをパンパンと叩き始める。 モモコ　「でもなぁ～慎くんに集中できないんじゃ何の為に行くんだか……」 ○奈々、さらに叩き続ける。モモコの上にチョークの粉が降り注がれる。 モモコ　「……んっ？げほっ！げほほっ！！……ち、ちょっとお！？」 ○奈々、階下のモモコに気が付く。 奈　々　「えっ！？……あっ、ごめんなさい！いたんですか？」 モモコ　「いたんですか？…じゃないでしょおおっ！もうっ！どうしてくれるのよ！真っ白じゃないのっ！！」

○奈々上からひたすら謝る。

奈　々　「す、すいませんっ！ほんと、ごめんなさい！」

○モモコ、何か閃く。

モモコ　「ねえっ！あんた今日ヒマ！？」

奈　々　「……は？」

7	Teacups店内(午後)

○琴乃がレジで女性客の対応をしている。

琴　乃　「５３０円になります」

女性客　「あ、あのぉ…ちょっと御願いがあるんですけど……」

琴　乃　「はい、なんでしょうか？」

○女性客がレジ後に並ぶ琴乃の私物である漫画蔵書を指差す。

女性客　「そこの漫画……○○○の３巻から６巻まで…一日で結構ですから貸して頂けませんか？」

琴　乃　「はぁ……」

女性客　「実はこの漫画、昔大好きだったんですけど……今集めようと思っても、２巻までしか見つからなくて……」

琴　乃　「そうなんですよぉ～！この漫画結構マイナーで最近じゃあんまり見かけませんものね～」

女性客　「ダメですか？…もちろん身元も連絡先も証明しますし、絶対に汚したりしません！」

琴　乃　「構いませんよ。漫画は私の管理ですから♪今袋に入れますね」

女性客　「ありがとう～っ！ココちょくちょく利用させてもらいますね♪」

×　　×　　×

○女性客がお辞儀をして出て行く。

琴　乃　「すごいっ！ 私の漫画も立派にお店に貢献してますね♪」

真　鈴　「……そ、そうだね(すごく意外そうな表情)」

マスター「(呆れて)って言ったってココは漫画喫茶じゃないんだから」

真　鈴　「って言っても、店主に信用が無いから説得力も無いわよね～、お客がお店に来てくれるだけで文句は言えないわよね～」

マスター「おいおい（困）」

真　鈴　「（イジワルに）いっその事、壁面全部漫画にしちゃおうか？（笑）」

琴　乃　「（目を輝かせて）ステキ～☆」

真　鈴　「（ちょっと焦って）冗談…。冗談だからね……（汗）」

8	駅前（夕方）

○夕方。モモコと奈々が駅前で並んで立っている。
モモコは私服。奈々は制服のまま。

奈　々　「（そわそわして）……や、やっぱりあたし帰る」

モモコ　「まぁまぁ…大丈夫だよ。コンパって言ったって別に獲って食われるわけじゃないんだから」

奈　々　「だ、だって…あたし、コンパなんて来たこと無いし……男となんて話せるか……」

モモコ　「なぁに？あたしに借り作ったまま帰るっての？」

奈　々　「・・・・・・」

モモコM『パッとしないし、男にも興味無さそうだし…頭数合わせにはピッタリだわ♪』

○二人の背後から声がする。

声（慎之介）「何？問題発生？」

○二人が振り向くとそこには瀧川慎之介と友人の太一と芳信の三人が立っている。

慎之介　「早く解決して欲しいんだけど（笑顔）」

モモコ　「（慎之介にくっつき）慎くぅん♪大丈夫！今解決したから♪」

○奈々と慎之介の目が合う。慎之介が爽やかに笑う。
奈々は少し赤くなって視線を逸らす。
○モモコが奈々に慎之介を紹介する。

モモコ　「こちら、あたしのお友達で瀧川慎之介くん」

慎之介　「よろしく～♪」

真　鈴　「って言っても、店主に信用が無いから説得力も無いわよね～、お客がお店に来てくれるだけで文句は言えないわよね～」

マスター「おいおい（困）」

真　鈴　「（イジワルに）いっその事、壁面全部漫画にしちゃおうか？（笑）」

琴　乃　「（目を輝かせて）ステキ～☆」

真　鈴　「（ちょっと焦って）冗談…。冗談だからね……（汗）」

8	駅前（夕方）

○夕方。モモコと奈々が駅前で並んで立っている。
モモコは私服。奈々は制服のまま。

奈　々　「（そわそわして）……や、やっぱりあたし帰る」

モモコ　「まぁまぁ…大丈夫だよ。コンパって言ったって別に獲って食われるわけじゃないんだから」

奈　々　「だ、だって…あたし、コンパなんて来たこと無いし……男となんて話せるか……」

モモコ　「なぁに？あたしに借り作ったまま帰るっての？」

奈　々　「・・・・・・」

モモコM『パッとしないし、男にも興味無さそうだし…頭数合わせにはピッタリだわ♪』

○二人の背後から声がする。

声（慎之介）「何？問題発生？」

○二人が振り向くとそこには瀧川慎之介と友人の太一と芳信の三人が立っている。

慎之介　「早く解決して欲しいんだけど（笑顔）」

モモコ　「（慎之介にくっつき）慎くぅん♪大丈夫！今解決したから♪」

○奈々と慎之介の目が合う。慎之介が爽やかに笑う。
奈々は少し赤くなって視線を逸らす。
○モモコが奈々に慎之介を紹介する。

モモコ　「こちら、あたしのお友達で瀧川慎之介くん」

慎之介　「よろしく～♪」

奈　々　「ど…どうも、小原奈々です（緊張している）」

〇慎之介、奈々を見詰めて微笑む。
〇モモコが奈々と慎之介の間に出てくる。

モモコ　「（慎之介の友達を見て）こちらが慎くんのお友達？」

慎之介　「ああ、太一と芳信」

太一と芳信「よろしく～♪」

〇モモコ満面の笑みで。

モモコ　「よろしく御願いしま～す♪」

モモコM『お供の者……顔はまぁまぁってトコね』

〇慎之介の視線はうつむいた奈々を捕らえる。

9	カラオケボックス内（晩）

〇みんながカラオケで盛り上がっている。
〇モモコが歌って、太一と芳信が盛り上げている。
　奈々は一人で浮いている感じ。
〇慎之介が奈々に話しかける。

慎之介　「奈々ちゃん…だっけ？」

奈　々　「は、はい……」

慎之介　「全然歌って無いじゃない？カラオケとかあんまり興味ないの？」

奈　々　「いえ…あの、そんなことも無いんですけど……」

慎之介　「あ！もしかして…めちゃめちゃ音痴だったりして？（笑）」

奈　々　「そんなっ！メチャメチャって程では……」

慎之介　「そうなの？実は俺さ…」

〇慎之介、奈々の耳元に顔を近付けて。

慎之介　「スッゲー音痴なんだよね……（小声で囁く）」

〇奈々、びっくりして慎之介に向くと、慎之介はニカッと爽やかに笑顔。
〇奈々真っ赤になって驚くが、慎之介の屈託の無い笑顔に奈々も自然と表情がほころぶ。

慎之介　「やっぱり奈々ちゃん、笑った顔めちゃめちゃ可愛いね」

奈　々　「えっ？そんなこと……」

慎之介　「またまたぁ～すっげぇ可愛いよ、絶対モテるでしょう？」

奈　々　「そんなっ！あたしなんて全然……」

〇歌い終わったモモコが奈々と慎之介の間に割り込んで座る。

モモコ　「そうなの～♪厳選したあたしの自慢のお友達だから～♪
ま、あたしには負けるけど？」

慎之介　「モモコはモテるだろ？誰でもＯＫだから」

モモコ　「ひっどぉーいっ！！あたしは慎くん一筋なのよっ！」

慎之介　「モモコの言葉ほど信用できないモンは無いからなぁ～（笑）」

モモコ　「もうっ！！（慎之介にじゃれる）」

〇モモコと慎之介のやり取りを羨ましそうに眺める奈々。
〇モモコと慎之介の間に割って入るように太一が入ってくる。

太　一　「ほらほらっ！モモコちゃん、俺とのデュエット曲始まるよ」

モモコ　「そうだっけ？ゴメン、キャスティング変更」

太　一　「はあっ？」

モモコ　「慎くん、〇〇〇〇って歌えたよね？ 一緒に歌おう♪」

慎之介　「はぁ～？…まぁ、別にいいけど……」

太　一　「え…ぇええ～っ！？」

〇モモコと慎之介のデュエット曲始まる。
〇慎之介は歌が上手い。慎之介の歌う姿を見て胸がキュッとする奈々。
同時に、モモコと慎之介のお似合いなデュエットを目の当たりにして、さらに胸が締め付けられる。

奈々 Ｍ　『モモコちゃんと瀧川君……いいなぁ』

〇歌が終わると奈々もみんなと一緒に慣れない拍手をする。
〇慎之介は迷わず奈々の横に座る。

奈　々　「ウソ…つきました？」

慎之介　「へっ？」

奈　々　「瀧川君…歌上手いじゃない」

慎之介　「そうかな～？」

〇奈々の前に慎之介のステキな笑顔。

慎之介　「惚れちゃった？（笑）」

〇真っ赤になる奈々。

奈　々　「そ、そんなこと…ない～っ（照）」

慎之介　「隠すな、隠すな♪俺ってなにげに罪な男だからさあ～（笑）」

〇モモコは確実に慎之介が奈々をターゲットにしている
　ことを察知する。
〇モモコの横に座っている太一が選曲マシンを操作しな
　がらモモコに喋りかける。

太　一　「モモコちゃん、今度こそ俺とデュエットね♪」

芳　信　「バカヤロウ、今度は俺だよ！どんだけ待ってると思って
　んだよ」

〇モモコはまったく聞いていない、

モモコM『う～ん…なんか状況良くないなぁ……作戦練り直すか？』

〇奈々が立ち上がる。

奈　々　「あのぉ…あたしちょっと……」

〇モモコも待ってましたと立ち上がる。

モモコ　「あ、じゃああたしも～♪」

太　一　「なになに～？二人でツレしょん？？（笑）」

モモコ奈々「サイテェ～っ！！」

〇みんな止まる。

太　一　「……え？」

10	カラオケボックスの女子トイレ内（晩）

〇トイレの洗面台で手を洗う奈々とメイクを直すモモコ。

モモコ　「奈々ちゃんさぁ…どう？今日のコンパ」

〇奈々、表情も明るく。

奈　々　「うんっ！思ったよりも……」

モモコ　「(奈々の台詞を食い気味で)たいしたこと無いでしょう？」

奈　々　「えっ？…あの…心配したほどじゃあ……」

モモコ　「ゴメンね～なんか無理やり付き合せちゃって…、
もう大丈夫だから帰ってもイイよ」

奈　々　「え？」

モモコ　「ほら、明日も学校あるしね。お家も心配してるでしょう？」

奈　々　「……」

○呆然と俯く奈々。

11	カラオケボックス内(晩)

○ボックスに帰ってくるモモコ。

モモコ　「ただいま～♪なんか、奈々ちゃん急に気分が悪いって、
帰っちゃったみたい……」

○ボックス内を見回すと慎之介がいない。

モモコ　「あれ？慎くんは？」

太　一　「知らねぇ、御レストルームさんにでも行ったんじゃん！？」

○モモコ、イヤな予感が走る。

12	駅前商店街(夜)

○奈々がトボトボと商店街の道を歩いて帰る。

奈　々　「(軽いため息)ふぅ……」

○奈々、背後から声を掛けられる。

声(慎之介)「ねぇ彼女、今ヒマ？」

○振り返ると慎之介の姿。

奈　々　「たっ！？」

慎之介　「夜道の一人歩きは危険でござるよ……送ってあげる」

奈　々　「瀧川くんっ！？…だ、だって、カラオケ……」

慎之介　「……ね？とりあえず、腹減らない？」

13	ファーストフード店（夜）

〇奈々と慎之介が向かい合って食事をしている。

慎之介　「へぇ、門限かぁ～、奈々ちゃんってお嬢様なんだ？」

奈　々　「とんでもない！ただ家が古いだけ。それと親がただ口うるさいだけだよ……」

慎之介　「ああ～いるいる、イチイチ子供の人生に干渉してくる親っているもんなぁ」

奈　々　「そうそう、細かい事からうるさいじゃない？」

慎之介　「それって子供のことをまったく信用していない証拠だよな」

奈　々　「門限が午後７時なんて…小学生じゃあるまいし、今どき周りの女の子じゃ誰もいないよ」

慎之介　「もっと子供の自主性ってのを尊重して欲しいよね」

奈　々　「そうそう！それっ！…瀧川君の家もそうなの？」

慎之介　「へ？ウチ？…まぁ同じようなモンかな？…シカトして遊んでるけど……」

〇二人の楽しそうな会話は続く。

奈々Ｍ　『わぁっ…こんなに男の子と話したのって初めてだぁ……不思議……瀧川君ってなんだかすごく親近感が持てるなぁ』

〇慎之介、ちょっとトーンを落として静かに話し始める。

慎之介　「……なんだか俺と奈々ちゃんって、どことなく似てるんだよな」

奈　々　「えっ？……（ドキッ）」

慎之介　「ちゃんと話してみて解った……俺と奈々ちゃんって絶対合うと思わない？」

〇見詰め合う二人。慎之介もちょっと真面目。
〇奈々は赤くなって俯く。

14	街道～帰り道（夜）

〇車通りのある道、奈々と慎之介が歩道を並んで歩いている。

奈　々　「今日は本当に楽しかった、本当にどうもありがとう」

慎之介　「ははは っ、どういたしまして（笑）」

奈　々　「……」

〇奈々、何を話していいのか？解らず無言になる。

慎之介　「午後８時２０分……門限、完全アウトだね」

奈　々　「ふふっ…また大目玉かも」

〇慎之介、隣の奈々の手を握る。

慎之介　「どうせ怒られるなら……もうすこし俺と一緒にいないか？」

〇慎之介の手に力が入り、奈々を引寄せる。
〇奈々は、心臓が今まで感じたことが無いほど早く動いているのが解る。
〇慎之介が更に力を入れ、奈々を抱きしめる。

奈々Ｍ　『わぁあああっ！ヤバイ！ヤバイ！心臓がっ……』

奈々Ｍ　『……あ、いいにおい、香水？コロン？ん？』

〇慎之介が奈々を熱く見つめる。
〇二人の距離がどんどん縮まっていく。

奈　々　「……えっ、だっ…だって、今日会ったばっかりだよ…」

慎之介　「……奈々ちゃん」

〇慎之介の顔が奈々の顔にどんどん近づく。
〇奈々と慎之介の唇が触れる寸前、奈々が慎之介の腕を振り払い、背中を向ける。

慎之介　「……（慎之介の意外そうな表情）」

奈　々　「あ、あっ、あのっ……き、今日は本当に……あ、ありがとうございました」

慎之介　「……（どんどんテンションが下がる）」

奈　々　「あの……また今度…会ってもらえますか？」

慎之介　「……ああ（ため息交じり）」

奈　々　「あの……じゃあ、ここで……家、すぐ近くなんで」

慎之介　「……うん」

〇奈々が帰る後姿を見つめる慎之介。ポケットからマルボロを取り出し吸い始める。
〇何かに気付く慎之介（ポケットの携帯のバイブ着信）ポケットから携帯電話を取り出し、通話ボタンを押す。

慎之介　「はい？」

15	カラオケボックス室外(夜)

〇カラオケボックスの室外廊下で電話をしているモモコ。

モモコ　「はい！？じゃないわよっ！何回電話したと思ってるのよっ！なんで電話で無いのおっ！？」

慎之介電話『……わりぃ』

〇モモコ、一息ついて冷静さを取り戻す。

16	街道～夜道(夜)

モモコ電話『……今、一人なの？』

慎之介　「ああ……なんで？」

モモコ電話『どうせ、奈々と一緒に出たんでしょ？』

慎之介　「……」

17	カラオケボックス室外(夜)

モモコ　「慎くん！？」

慎之介電話『うるせぇよ…』

18	街道～夜道(夜)

慎之介　「俺がどこへ行こうが俺の勝手だろうが！イチイチ干渉すんじゃねぇよ」

モモコ電話『……まあ、そうだけど……』

慎之介　「……」

19	カラオケボックス室外(夜)

モモコ　「……慎くん？」

慎之介電話『……一人だよ』

モモコ　「本当に？」

慎之介電話「ああ、別に誰もいねぇよ。ここに来れば証明してやれるけどな……」

モモコ　「うん！行く！」

慎之介電話『ほい…じゃあ、〇〇の海岸で待ってるから』

〇モモコが目を瞑って嬉しさを噛み締めている。

20	街道～夜道（夜）

〇慎之介が辺りをタバコを吸いながら見回している。

モモコ電話『慎くん……』

慎之介　「あ？」

モモコ電話『……ゴメンね』

慎之介　「ああ、早く来いよ…」

〇慎之介タバコを咥えながら、ポケットを漁っている。
※要するに電話には興味が無い※
〇慎之介、電話を切るとタバコの煙を深く吐き出す。

21	小原家居間（夜）

〇小原家の居間で奈々が正座をさせられて、父親に小言を言われているシーン。

奈々Ｍ　『帰った後にあたしは父親にたっぷりと叱られた……
一時間半の門限破りが、なぜか？二時間以上…と、このオヤジには認識されているようだ……』

22	小原家外観（夜）

〇小原家の外観。奈々の部屋に明りが灯る。

奈々Ｍ　『……でも』

23	奈々の部屋（夜）

〇フラフラと部屋内に入る風呂上りパジャマの奈々はそのままベッドに倒れ込む。

奈々Ｍ　『どんなに長い小言も正座も……まったく苦痛と感じなかったのは、何故だろう？』

〇奈々、携帯を取り出しアドレスをめくる。
そこに表れた瀧川慎之介の名前で止まる。
〇頬を染めてニヤける奈々の幸せそうな表情。

24	〇〇海岸（夜）

〇暗い海面に波が打ち寄せる。
〇砂浜で花火をして遊んでいる慎之介とモモコ。

○海岸で遊ぶ慎之介とモモコのシーンに奈々のモノローグを被せる。

奈々M　『よく解らないけど…今まで感じたことの無い不思議な感覚が、自分にまとわりついている気がする……』

○慎之介がドラゴン花火に火を点けている。
モモコは近くの流木に腰を下ろして笑顔で眺めている。

奈々M　『気持ち悪いような……気持ち良いような……不思議な気分……』

○慎之介がモモコの横に腰を下ろすと同時に上に火を噴くドラゴン花火。盛り上がるモモコ。

奈々M　『きっと、他のみんなは…こんな感覚に身を預けながら、あたしと同じ毎日を、ずっと過ごしていたんだろうな……』

○モモコの顔に慎之介の顔が近づく。

奈々M　『…ズルイ…』

○モモコと慎之介がキスをする。
○びっくりするモモコ。
見詰めあう二人は、花火をバックにもう一度キスを交わす。

奈々M　『……羨ましいな』

25	奈々の部屋（夜）

○携帯を握り締めたまま眠ってしまった奈々。

奈々M　『なんだか損していた気分…こんな気持ちに、もうすこし早く気付いていればなぁ……』

26	海岸線（朝）

○海岸線に朝が来る。

27	ラブホテル室内（朝）

○ベッドの脇に置いてある携帯がバイブ着信で震える。
手を伸ばすとその揺れは止まった。（メール）
○男の手が伸びると、携帯を開いてメールをチェックする。

～メール文面～
『瀧川クンおはよう☆急にメールしてゴメンね。
昨日は送ってくれてどうもありがとう。嬉しかった♪
今日は一時間目から体育で最悪だよ～（ＴＡＴ）
じゃ、頑張っていってきます！　　奈々』

○布団から上半身だけ出して、枕にもたれて座る慎之介。
上半身は裸。その横にモモコが布団を掛けて眠っている。

慎之介　「……っていうか早くね～？学校なんて午後からだろう？
フツー」

28	バス停までの通学路(朝)

○凪と奈々が並んで歩いている。
○奈々がなんだかニヤけながら歩いている。
そんな奈々に苦笑気味の凪が話しかける。

凪　「ちょっと何よ、気持ち悪いなぁ…なんかイイ事でもあったの？」

奈　々　「へへっ、ちょっとね～♪」

凪　「なになに？教えてよ～、アンタとあたしの仲じゃない」

奈　々　「凪には良いかなぁ～♪」

○奈々、凪に向き直り。

奈　々　「え～、このたびワタクシ小原奈々にボーイフレンドができました♪」

○思いもよらない答えに凪が動揺する。

凪　「えっ？」

奈　々　「だからぁ、ボーイフレンドよボーイフレンド♪
初めてのボーイフレンドすっごく優しいし…素敵だし…
どっかあたしと似てるのよね～」

凪　「えっ？…だって奈々…男は嫌いだって……？」

奈　々　「男と王子様は別モンだも～ん♪…いやあ～♪王子様って
ホントにいるんだねぇ……これはもう運命よ！」

凪　「意味解んない……昨日と言ってること全然違うじゃん！」

○凪が目を合わそうとしないのを察知し、奈々が凪の顔を覗き込む。

奈　々　「……凪、祝福してくれないの？」

凪　「だって……」

奈　々　「あ～解った！」

凪　「何が？」

奈　々　「大丈夫……ボーイフレンドが出来たって凪はずっとあたしの親友だし…、凪は綺麗な娘だからあっという間に、すぐ彼氏くらい出来るから」

凪　「はあ？いらないよっ！そんなモン！」

奈　々　「凪ってば、なにをそんなに怒ってるのよ？」

凪　「怒ってなんか……」

〇凪、冷静さを保とうとしている。

凪　「それで？……どんな男なのそいつ？」

奈　々　「すごく素敵な人…話しやすいし、すごく気を使ってくれる…」

〇現実を受け止めよう…と、落ち着いて話を聞く凪。

奈　々　「とにかくあたしの知り得る男なんかとはまったく違うの！本当に王子様みたいにスマートで優しい人なの…瀧川君は」

〇凪、『瀧川』という名前に違和感を覚える。

凪　「瀧…川…？」

×　×　×

〇［回想差込み］女生徒ＡＢと凪の会話のシーン。
学食での会話。女生徒Ｂが呆れながら発言。

女生徒Ｂ回想『あの瀧川だよ！？…信用するあんたが馬鹿なのよ……』

×　×　×

凪　「ち、ちょっと待って！（突然大声で）」

奈　々　「わあっ！？（凪の台詞食い気味で、驚いている）」

凪　「……その瀧川ってまさか……瀧川慎之介？」

奈　々　「えっ！？凪知ってるの？」

凪　「知ってるもなにも…同じ学校よ」

奈　々　「へえ～、偶然～♪」

〇いつものバス停付近まで辿り着く。

凪　「……ねぇ奈々、悪い事は言わないから、奴だけはやめておきな…」

奈　々　「……なんで？」

凪　「あいつはヤバいんだって！…奈々、絶対泣く事になる」

奈　々　「そんなこと無い！瀧川君は他のどこにでもいるような馬鹿男とは違うよ！」

凪　「聞いたんだよ…瀧川って奴は今まで何人もの女をとっかえひっかえ遊んできてるんだよ！……このままだと奈々もその中の一人に……」

奈　々　「ヒドイ…なんでそんな事言うの？…凪は本当の瀧川君をなにも知らないくせに！」

凪　「奈々…」

奈　々　「瀧川君はそんな人じゃない……瀧川君は…あたしと同じで本当に自分を解ってくれる人を求めてるんだ…」

凪　「……」

奈　々　「もし…もしも瀧川君が今までそうだったとしても…それは女の子達が本当に瀧川君を解ってあげようとして来なかっただけだもん…絶対そうだもん！」

凪　「それは違うよ……男なんてみんな同じだって、特に瀧川はそんな王子様なんかじゃ…絶対ない」

奈　々　「なんで？…なんでそんな解ったような事が言えるの？凪もウチのお父さんと同じ……全然信用してくれてない……あたしのことも、瀧川君の事も！」

凪　「ちがうっ！！……あたしは奈々の事を想って…奈々には悲しい思いなんてして欲しくないから……」

奈　々　「だから管理するのっ！？」

凪　「ちがうっ！！」

○凪が勢い余って奈々を抱きしめる。

凪　「奈々が……大好きだから……」

奈　々　「……凪」

凪　「ずっと奈々の事だけを想ってた…奈々だけが大事なの……奈々だけを解ってあげたかった……」

奈　々　「……」

○少し離れたバス停にバスが来る。

凪　「奈々を……男なんかに渡したくないよ」

○奈々、凪の腕の中から静かに離れる。

凪　「奈々……」

奈　々　「……ごめん、バス…着たから」

凪　「なっ……」

○奈々が凪に背を向け、バス停まで駆け寄る。
○バスに乗り込む奈々。バスは発進。
○バス停に一人取り残される凪を奈々は振り返りもしない。

29	バスの中(朝)

○バスの中で携帯電話を掛ける奈々。携帯はすぐに留守電に変わってしまう。
○メールをチェックしても、瀧川からの返信も無い。

30	Teacups前防波堤(午前)

○Teacups遠景。店の中からマスターがそろりと出てくる。外に立て掛けてあるサーフボードを抱えてダッシュする。
○追って店内から琴乃の姿が出てくる。

琴　乃　「マスター！真鈴ちゃん買い物出てるし…あたし一人になっちゃいますよ～！」

マスター「どうせ午後まで客なんかこね～よ～っ♪(走りながら言う)」

琴　乃　「もうっ……んっ？(何かに気付く)」

○Teacupsから広い道路対岸の防波堤に海側を向いてぽつんと座っている凪の姿。その表情は茫然自失でボーっとしている。
○凪の背後から声(琴乃)が掛かる。

琴乃(声)　「いっけないんだ」

凪　「……(無言で振り返る)」

琴　乃　「学校サボっちゃったんでしょ？(笑顔)」

凪　「別に……ほっといてください」

琴　乃　「了解♪」

○琴乃防波堤に背を向けてもたれ掛かり、そのまま黙る。

	凪　「……なんですか？」 琴　乃　「ほっといてください」 凪　「(苦笑)…ワケわかんない」 琴　乃　「よく言われる♪(笑)」 凪　「……あたしもです。ほんと、ワケわかんない」 〇琴乃がただならぬ凪の雰囲気を察する。 琴　乃　「ね？暇ならちょっと付き合ってくれないかな？」 凪　「え？」 琴　乃　「あたしもヒマなんだよね」
31	Teacupsの中(午前)
	〇Teacups店内。紅茶のカップ。 琴　乃　「……海に」 〇琴乃を見る凪。 凪　「え？」 琴　乃　「そのまま飛んでっちゃいそうな顔してた。あなた」 〇凪がため息一つ。 凪　「そんな事考えてました……このまま海を越えて山も越えて…どこか遠くに飛んで行っちゃいたい…」 琴　乃　「余計なお節介…焼いても良い？」 凪　「どうかな？…お姉さん引きそう」 〇凪、俯いて苦笑しつつ。 凪　「ははっ…普通引くよね…引くよ…普通」 琴　乃　「……あたしには言葉が溢れ出しそうに見えるなぁ」 凪　「……」 琴　乃　「いっぱいいっぱいだ…」 凪　「いっぱいいっぱいか…確かに……」

○凪、紅茶を一口飲む。

凪　「あたし…親友を好きになっちゃいました……女の子です勝気でまっすぐで、単純でドジで…可愛くて優しくて…ずっとずっと……好きでした。変ですよね？」

琴　乃　「全然。誰かを想うことは素敵なことだよ…」

凪　「あたしとその子は小さい頃からいつも一緒で…二人で一人でした。あたしにとってその子は…奈々は何よりも大切な存在なんです」

凪　「だから…あたしが絶対に彼女を守りたかった」

琴　乃　「…守る？」

凪　「今、彼女…間違った選択をしようとしています…このままだと…きっと彼女は絶対に傷つきます」

凪　「彼女の泣き顔は見たくない…彼女が悲しむなんて、あたし…考えられないんです。だから…」

凪　「……彼女を救いたいと願う気持ちが、逆に彼女を傷付けちゃったみたいです」

○凪、自嘲して。

凪　「…サッパリ意味わかんないですよね？すみません」

琴　乃　「ううん、解るよ……」

琴　乃　「あなたが、どれだけその子を大事に想っているか、よく解る」

凪　「お姉さん…」

○琴乃が紅茶を一口飲む。しばしの間。

琴　乃　「彼女を救いたい、守る…って言ってたけど、その子…それが辛かったのかも知れないね？」

凪　「……でも」

琴　乃　「彼女…あなたが守ってあげないと何もできない…一人ではなにもできない人間なんだ…って、大好きなあなたに言われたのがショックだったんじゃないかな？」

凪　「……（俯く）」

琴　乃　「誰かが舗装してくれた道をただ歩いて行くって、全然傷つかないし、くたびれることも無いけど…それって誰かの持ち物と一緒なんだよね」

凪　「持ち物…」

琴　乃　「どこかからどこかへ運んでもらうただの持ち物……これって人としての面白さって味わえるのかな？」

×　×　×

○【奈々の回想差込み】

奈々回想『だから管理するのっ！？』

×　×　×

琴　乃　「その子、今、自分で歩いてる充実感でいっぱいなんだと思うよ」

琴　乃　「多分その子は傷つく。絶望に自分自身を消したくなるような気持ちになるかも知れない…でも、その子絶対、今までよりも輝いてると思うよ」

凪　「輝き…」

琴　乃　「…その時、彼女と一緒にいてあげられるのは…誰なんだろうね？」

○凪俯き、頭を掻く。

凪　「はは…キツイなぁ…」

琴　乃　「頑張って……輝いてる彼女と向き合う時…きっとあなたも輝いてると思うよ」

○凪が声を殺して泣いている。
○琴乃が凪の肩を叩いて慰める。

琴　乃　「二人で一人じゃない…二人は二人だもん」

32	奈々の女子校～廊下（昼間）

○奈々が携帯を握っている。呼び出し音が響く。

呼出し音『ぷるるるっぷるるるるっぷるっ……こちらは留守番伝言サービスです……』

奈　々　「……どうして？なんで出てくれないの？」

×　　×　　×

○【慎之介の回想差込み】

○楽しそうに語らう慎之介と奈々の図。

奈々回想『また今度、会ってもらえますか？』

慎之介回想『……ああ』

×　　×　　×

奈　々　「どうして？」

32	奈々の女子校～モモコのクラス(昼間)

○モモコのクラスに奈々が行く。奈々がクラスの女子二人組み(女生徒C・D)に話しかける。

奈　々　「すみません…モモコちゃんは？」

女生徒Ｃ「モモコ？…知らない、今日来て無いみたいよ」

奈　々　「そうですか…」

女生徒Ｄ　「どうせまたどっかで男とイチャついてるんじゃないの？」

女生徒Ｃ「あの娘、ほんっと好きだから(笑)」

女生徒Ｄ「マジ終わってるよね～♪」

×　　×　　×

○【回想差込み】モモコと慎之介が仲良くデュエットしている姿。

○【回想差込み】凪が奈々に諭すシーン。

凪　回想『アイツはほんとにヤバいんだって！』

×　　×　　×

○不安げな表情の奈々。
○奈々は携帯の電話帳を開き確認し始める。

奈　々　「……あ、モモコちゃんの電話番号交換してない」

○奈々かけだす。

32	奈々の女子校～校外（昼間）

〇まだ授業は終わっていないのに校門を駆け抜ける奈々。

33	駅前（昼間）

〇町の中を奈々が人を探しながら駆け巡る。

奈々　M『バカみたい…なにしてるんだろう、あたし……』

〇必死で探す奈々。

奈々　M『…バカみたい！』

34	小原家（夜）

〇自宅に帰りつく奈々。
〇家の中では父親が待ち構えている。

奈々の父「奈々っ！今何時だと思ってるんだっ！？」

奈　々　「……」

〇怒鳴られつつも、ボーっと父親を見つめる奈々。

奈々の父「それにお前…今日学校を無断で早退したそうじゃないか！？」

奈々の母「お父さん…あまりヤイヤイ言ったら奈々も何も答えられないじゃないですか」

〇奈々は、何も言わず自室へ行こうとする。（呆然と）

奈々の父　「奈々っ！お前…俺達がどれだけ心配したと思ってるんだ」

奈　々　「……別に頼んでない…」

〇奈々の父が奈々を平手で張り倒す。

奈々の母「お父さん！顔はダメ！！」

奈々の父「お前はっ！まともに話もできないのかっ！？」

奈　々　「あたしなんか……」

〇奈々が家を飛び出る。

奈々の母「奈々っ！」

奈々の父「ほっておけ！！」

35	夜道(夜)

○夜道をトボトボ歩きながら携帯をかけている奈々。
携帯は呼び出し音から留守番メッセージへ。そのまま切る。
○携帯の番号をめくり進めると凪の番号で手が止まる。

奈　々　「……凪」

○すると見たことのない番号から着信が。電話に出る。

奈　々　「…もしもし」

モモコ電話『奈々ちゃんっ！？』

奈　々　「モモコちゃん！？…なんであたしの携帯番号を？」

モモコ電話『そんな事よりっ！！今、一人！？』

奈　々　「ひ、一人だけど……」

モモコ電話『証明できる！？』

奈　々　「は、はあ？」

モモコ電話『今からそっち行くから！…今どこ！？』

奈　々　「え、えっと……」

○奈々、辺りをキョロキョロと見回す。
○すると一軒の喫茶店『Teacups』が目に入る。

36	Teacups店内(夜)

○カウンターで琴乃が紅茶を入れつつ、真鈴はカウンターで肘つきつつ状況をチラ見している。マスターは無関心。
○店内のテーブル席にモモコと奈々が向かい合い座っている。

モモコ　「……本当に一人だったんだ」

奈　々　「うん…」

○無言の間。

モモコ　「…あ、携帯番号ね…実は慎くんの携帯からチョッパらせてもらったんだ」

○奈々の血の気が引く。
○真鈴が二人分の紅茶を運んでくる。

真　鈴　「お待たせしました」

奈　々　「……」

モモコ　「もしかしたら、またあんたとこっそり会ったりしてるかも～なんて、ね…」

奈　々　「…モモコちゃんと瀧川君って……どういう関係なんですか？」

モモコ　「知りたい？」

○モモコは苦笑しつつ反応を見る。
奈々は俯いたまま固まって答えを待つ。

奈　々　「……」

モモコ　「……別に、なんでも無いわよ…」

○奈々、俯きながら内心ホッとしている。

モモコ　「たった一回寝ただけ、それも昨日」

○奈々、愕然とする。

モモコ　「そう…あんたも一緒に合コンした昨日にね」

奈　々　「……」

×　×　×

○【回想差込み】奈々と慎之介の楽しげなカットいくつか。

×　×　×

モモコ　「あたしもバカだよねぇ……たった一回寝ただけで付き合ってるなんて勘違いしちゃうんだから…」

奈々　M『あたしなんて……何も無い』

モモコ　「どこにもいないのよ……全然連絡取れないの…まいっちゃう…」

奈々　M『……やだ』

モモコ　「今までどんな男と付き合ってきたって…こんな気持ちになる事なんか無かったのに…ほんとまいる」

奈々　M『…帰りたい……ここから今すぐ消えて無くなりたい！』

モモコ　「恋愛の伝道師と言われたこのあたしが……たかが一人の男と連絡が取れないだけで…こんな醜態さらしてるなんてね…へへっ」

奈々　M『……どこへ？』

〇モモコも俯いて肩を揺らしている。
〇奈々、モモコを見る。

奈々　M『……これが痛みなんだよね…凪』

〇モモコの手を握る奈々。

奈　々　「大丈夫…大丈夫だよ…あたしの所なんて絶対に来ないから」

〇奈々、モモコとちゃんと向き合って。

奈　々　「大丈夫…絶対にモモコちゃんのトコへ戻ってくるから」

モモコ　「…ふんっ……なんの根拠があって？」（涙目で強がりながら）

奈　々　「根拠は…無いけど」

モモコ　「まったく……あんたってホントお子ちゃまねぇ…」

〇モモコが奈々の手を握り返す。

モモコ　「あんたの手…メチャメチャあったかいんだもん（微笑む）」

〇微笑んでいる琴乃と真鈴。マスターは後ろを向いてカップを拭いている。

〇そこへカップルが入店してくる。慎之介と知らない女だ。

慎之介　「シケた店なんだけど、紅茶だけは美味いんだよ、この店」

女　「紅茶なんかどこだって飲めるじゃん、どこだってね♪」

慎之介　「おっ♪話が早いね～♪じゃ今から移動しちゃう？」

奈　々　「たっ…瀧川君っ！？」

〇慎之介、店内をよく見回す。奈々とモモコを確認する。

慎之介　「えっ？こんな時間に…ぇえっ！？モモコまでいるの？
なんだか厄介なトコ来ちまったなぁ～」

奈　々　「瀧川く…！！（激怒）」

〇奈々が慎之介に食い下がろうとする刹那、モモコが慎之介に紅茶を引っかける。琴乃と真鈴も唖然。

慎之介　「うわっ！？ちゃ…あちあちちっあちぃいいっ！！
なにすんだっ！？」

モモコ　「美味しいって評判の紅茶でしょ？早速飲ませてあげたのよ♪感謝しなさい！」

○あんぐりと口を開けて見ていた奈々も、追っかけで紅茶を引っかける。

奈　々　「もう一杯…えいっ！」

慎之介　「うわっちちっ！！ちくしょっ！あちぃいいっ！！」

女　「もうっ！！なんなのこいつらっ！？タッキー行こうっ！」

○女が慎之介を引きずり出て行く。
○店内に奈々とモモコの荒い息が響く。
○マスターがモップを持ってカウンターから出てくる。

奈　々　「あっ！…あの、すみません……お店を汚しちゃって…」

マスター　「紅茶は……やっぱり熱いのに限るな」

○奈々とモモコ、きょとんとして床を拭くマスターを見る。
○マスター、ニッコリと親指を立てる。
○店内の緊張が一気に緩み、みんなで大笑い。

奈々　M『それからマスターが入れ直してくれた紅茶を飲んでお店を出た…』

○画面Ｆ．Ｏ．

37	海岸線の道（夜）

○奈々が一人で海岸線をとぼとぼと歩く。

奈々　M『どことなく優しい味のするそのお茶を飲んでいたら、無性に凪の顔が頭に浮かんだ……』

○奈々の携帯電話。凪の番号を表示している。
○通話ボタンを押す奈々の指。携帯を耳へ。発信音が流れる。
○すると奈々の後ろから携帯の着信音がする。
○振り返る奈々、10mほど後に凪が携帯を持ちながら歩いていた。奈々の耳元で響く発信音が切れると、凪がゆっくりと携帯を耳に当てた。

奈　々　「…もしもし」

凪　「ははっ……なんか、ストーカーみたいだね…ゴメン」

○奈々は静かに首を振る。そのままゆっくりと凪に歩み寄る。

奈　々　「…会いたかった」

凪　「あたしも…」

〇凪の目の前に辿り着くと、凪の肩に頭を付ける奈々。
二人とも携帯はずっと耳に当てている。

奈　々　「ずっと見ててくれてありがとう……」

凪　「……まあね」

〇凪と手を繋ぎ、横に並ぶ奈々。

奈　々　「帰ろうか♪（笑顔）」

凪　「また親父さんにどやされるかもね」

奈　々　「さっきなんか殴られた～っ！」

凪　「嘘っ！？どこっ！？大丈夫っ！？」

奈　々　「あ～っ！なんかヒリヒリするし～っ！！」

凪　「ああ～大丈夫？冷やす？」

〇オロオロする凪。
〇二人で帰り道を歩く。
〇握り合った手のカット。

奈々　M『先の事なんてなんにも解らないけど、今はこの大事なぬくもりと一緒に歩いていこう……自分のペースで』

ー第二話・終ー